

高2現代文 第13節「合理的人間像の限界」

■原発のリスク計算をめぐる 中島岳志と池田信夫

■近代社会の理想的人間像＝合理的で利己的な個人(経済人:ホモ・エコノミカス)

→標準的経済学はこうした人間像をモデルとして理論を組み立てるし、民主的政治制度は「利害の異なる合理的人間同士の交渉の場」として機能することが期待されている。

■「限定合理的」な人間像へ

…人間には認知のバイアスや感情の働きがあり、完全に合理的な主体にはなれない

1970年代 ダニエル・カーネマン(2002,ノーベル経済学賞)やエイモス・トヴェルスキーによる認知バイアスの発見→これらを組み込んだ「行動経済学」の創始。

<人間の認知バイアスの主な例>

- ・時間選好…遠い将来の大きな利得よりも、近い将来の小さな利得を選ぶ
- ・アンカー(係留)…参照点が先に示されると、それに影響される
- ・代表性バイアス…特定のカテゴリーの特性に注目して、その確率を過大に見る。(参考)リンダ問題
- ・恒常性バイアス…「悪いことは起きていない」と自分の都合の悪い情報を無視する
- ・確証バイアス…自分の意見にあった情報ばかりを集めて補強し、「確証を得た」と思いこむ

※近代の社会は、人間が理性を用いて合理的にふるまうことを(少なくとも理論上は)期待して成り立ってきた。この期待が崩れた時、社会設計のあり方はどのように変わるだろうか？

読解教材:安藤馨「あなたは「生の計算」ができるか」

- ・著者は1982年生まれ。神戸大准教授。功利主義系の法哲学者。
- ・安藤の論を、段落ごと、そして全体にわたって要約しよう。
- ・安藤の考える社会像について、君たちはどう考えるだろうか？

■20世紀の「理性の限界」をめぐる諸議論

(…数学が苦手な澤田にはきちんと説明できないので、紹介だけ)

(1)ゲーデルの「不完全性定理」 1931年

自然数論を含む数学のシステム S において、真であるにも拘らず S のシステム内ではそれを証明できない命題 G (ゲーデル文)が存在することを示した。

(2)ハイゼンベルグの「不確定性原理」 1927年

量子論の分野において、粒子の運動量と位置を同時に正確には観察できないことを示した。

(3)アロウの「一般可能性定理(一般可能性定理)」 1951年

複数の選択肢から何か1つを選ぶ社会的選択において、社会が選択肢を合理的に選ぶための条件と、その社会が民主的に決定するための条件が、互いに矛盾することを示した。

●この3つのトピックについてさらっとイメージをつかみたい人(数式なし)

→ 高橋昌一郎『理性の限界』が最適。

●きちんと知りたい人は、以下の本を読んでみよう。いずれも定評ある著作(数式あり)。

ゲーデルの「不完全性定理」 → E. ナーゲル『ゲーデルは何を証明したか』

ハイゼンベルグの「不確定性原理」 → 石井茂『ハイゼンベルグの顕微鏡』

アロウの「一般可能性定理(不可能性定理)」 → 佐伯胖『「きめ方」の論理』

参考文献・教材

友野典男「行動経済学」(光文社新書) 単なる事例の紹介だけに終わらないのが良い。

高橋昌一郎「理性の限界」 それまではバラバラに読むしかなかったトピックをまとめた好著。